

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

移民集落に見えた「変化」：2018年総選挙

谷口友季子（日本貿易振興機構アジア経済研究所リサーチ・アソシエイト）



各戸が掲げる政党の旗（筆者撮影）

2018年5月の総選挙では国民戦線（BN）から希望連盟（PH）へ政権交代が起こり、サバ州でもPHを支持する地域政党サバ伝統党（ワリサン・サバ）が中心の連合へと州政権が交代した。なぜ彼らは、BNを支持しなかったのか。サバ州のある集落の事例から考える。

州都コタキナバルの中心地から車で40分ほど、大型ショッピングモールに見える海外沿いに、約5,000人のフィリピン人移民が住む海上集落がある。01年ごろにつくられた集落は、その後3回の選挙でBN第一党である統一マレー国民組織（UMNO）の票田であった。しかし、今回反旗を翻し、この地域の議席は州議会（カランプナイ選挙区）連邦下院（スパンガール選挙区）とともにワリサン・サバが獲得した。連邦政府の閣僚であり、コタブルから同地域に選挙区を替えたラーマン・ダーランも、ワリサン・サバの新人を相手に1万3,000票近く差を付けられて敗北したのである。

この集落の住民は「フィリピン人移民」であるが、ブミプトラ（マレー系と先住民）とも認められ、古くからフィリピン・マレーシア（ボルネオ島）間の海域で暮らしてきたイスラム教のバジャウ族である。この集落にはマレーシア国籍を持っている者もいれば、近年移住してきた不法移民もいる。よって「未登録児童」の教育の問題や、不法住民がいることを理由にごみ収集や上下水道も未整備のため、衛生環境の問題も抱えている。

フィリピン人移民の流入は連邦政府によって合法/不法に促進されてきたため、サバ州の自治権が尊重されていないとして、長い間州政治の争点となってきた。特に非難してきたのが、与野党を問わず、キリスト教系先住民を中心とするサバ州の地域政党であったため、この集落の住民のようなフィリピン人移民はUMNO

を支持政党とする他なかった。

しかし、今年選挙時には一変した。村にはBNの天秤の旗だけでなく、ワリサンや他党の旗も多く掲げられ、混戦の様相を呈した。同じバジャウ族であるシャフィー・アブダルが党首としてワリサンを結成、選挙に参加したことは、投票の選択肢を広げた。また近年ようやく街へ出るまでの道路が舗装され、自家用車の所有者も増えた影響もあり、マレー半島部と同様に、GST（消費税）導入や燃料補助金の廃止への不満は大きかった。

他方、この集落特有の事情もあった。村内の家々の壁には、ワリサン・サバの候補や、前述のラーマン・ダーランのポスターが多く貼られているが、住民によると現職州議会議員でUMNO候補のジャイナ・アフマドのポスターは一枚もない。「皆大嫌いだから」だそう。彼女は州の党女性部長で州閣僚も務め、今や有力政治家だが、不法移民が居住していることを理由に、村内に山積する問題にきちんと取り組んでくれないという声が10年以上前からあった。他に投票する選択肢ができた今、わざわざ彼女を支持する必要はない。

BN議員への不満は広く知られていたため、住民らの選挙運動には力が入っていた。投票日直前の4月末には、村内の橋の修繕費補助や水道整備に加えて、集落が正式な「村」、住宅地として認められることが発表された。海軍基地の開発により土地を追われ、一時的に現在の地に居を構えたため、何度も立ち退きの可能性が持ち上がっていた。それが今回ラーマン・ダーランと当時の州首相の一声で解決されることになった。しかしそれでも、BNは支持を取り戻すことはできなかったのである。

今回の総選挙は、2つの政党連合による競合やGSTなど全国的な争点も重要であった一方で、州や地域の個別の文脈も影響力を持っていた。今後も両面に注目していく必要があるだろう。

< 筆者紹介 >

早稲田大学大学院政治学研究科博士課程在籍、日本貿易振興機構アジア経済研究所リサーチ・アソシエイト。専門は比較政治学、マレーシア政治。マレーシアを中心に、権威主義、新興民主主義国家における制度と政治参加に関心を持つ。